

『日本の介護保険と保健・医療・福祉複合体』序文

保健・医療・福祉複合体（以下、複合体と略す）とは、医療施設（病院・診療所）と保健・福祉施設の両方を開設し、保健・医療・福祉サービスを一体的に提供している組織であり、その大半は民間病院・診療所が設立母体となっている。複合体は私が概念を確立すると共に、独自の全国調査によりその全体像を初めて明らかにした。本書には、私が1998年～2004年の7年間に出版した4つの著作から、主として複合体を分析対象とした実証研究論文と評論を選んで、収録している。

複合体が日本に初めて出現した1990年前後には、それはまだ例外的存在だった。しかし、2000年の介護保険制度創設前後から、複合体は急増している。厚生労働省は、介護保険制度開始前は、医療・介護サービスの総合的提供を独立した施設間の連携（ネットワーク）で行うことを想定していたが、制度開始後は、私の研究に注目して、複合体の役割を公式に認めるようになってきている。そのために、現在では、複合体は、厳しい医療費抑制政策下で民間医療施設（特に病院）が生き延びるための重要な経営戦略となっており、現実にも複合体は介護サービスの提供組織の主役となっている。

私が所属する日本福祉大学の研究プロジェクト「福祉社会開発の政策科学形成へのアジア拠点」は、文部科学省が日本に世界的な研究・教育拠点を形成することを目的として開始した「21世紀COEプログラム」に、2003年度に採択された。この研究プロジェクトの柱の一つが、保健医療福祉の日韓比較研究であり、私もその責任者として、日韓の医療と医療政策の比較研究を、韓国の研究者や複合体経営者の協力を得ながら、始めている。その結果、民間病院が主体である日本と韓国の医療制度は、先進国（OECD加盟国）の中でもっとも類似しており、相互に学ぶことが多いことに気付いた。

特に韓国でも介護保険制度が2008年度に創設予定であることを考えると、本書は、韓国の医療・介護政策関係者や医療施設経営者が今後の施策や経営戦略を検討する上で、少なからず寄与できると自負している。

最後に、超御多忙にもかかわらず、翻訳の労をとられた延世大学保健科学大学保健行政学科教授丁炯先（Jeong, Hyoung-Sun）先生に心から感謝申し上げたい。

2006年4月17日

二木 立

日本福祉大学教授・大学院委員長・21世紀COEプログラム拠点リーダー

『日本の介護保険と保健・医療・福祉複合体』 記者序文

著者の二木立氏は、臨床医(リハビリ専門の)出身の医療経済学者であり医療政策研究者でもある。彼は1972年に東京医科歯科大学を卒業した学生運動世代である。大学卒業後は13年間東京の地域病院で脳卒中早期リハビリ診療と研究に携わった。これを集大成した著書『脳卒中の早期リハビリ』は日本初の脳卒中リハビリに関する EBMの文献だった。彼は 1985年から日本福祉大学教授に在職しながら政策的な意味合いが大きい実証研究を遂行して医療政策に関する批判ないし提言のための研究、言論活動を続けている。また最近(2004年)まで約 19年間を東京の地域病院でリハビリ外来と往診の臨床活動を行った。

二木立教授は 2003年から日本福祉大学の 21世紀 COE(Center of Excellence)プログラム「福祉社会開発の政策科学を形成するためのアジア拠点」のプロジェクトリーダーを務めている。これは日本に世界水準の大学を作るという目標の下に日本政府が始めた国家的プロジェクトで、福祉分野では約140の福祉系大学の中から日本福祉大学だけが採択された。この COEプログラムは5つの研究領域に分けられており、その中の一つ「韓日比較研究」において延世大学校保健行政学科と医療及び長期療養制度に関する共同研究が進行している。筆者と訳者の個人的な縁もこのような過程で生じた。

訳者が著者の名前を初めて知ったのは今から約15年前に東京大学大学院博士課程に留学していた時のことである。当時、すでに多作であった著者はその後も論文と著書を多数発表しており、日本の「保健・医療・福祉複合体」に関する研究は彼の専売特許になっている。

訳者が知っている二木立氏は真正の学者であり、徹底したヒューマニストである。社会主義者として国民に対して愛情を持っていながらも政策レベルで生ずる現実的限界を認める実用主義的柔軟性も持っている。このような彼の特徴はこの本の面々に染み出る。個人的には酒、タバコをほとんどやらず社交性は高くない人物だが、このような彼の特性は、逆に例外なく、夜明けと共に研究室に出勤し、絶え間ない学問的精進を行えるようにしている。その結果、多数の名作を出すことができたのだろう。

この本は著者の著書4冊の中から日本の介護保険及び保健・医療・福祉複合体に関する部分を抜粋して編纂した。その他に介護保険の5年決算と韓国に示唆を与える最近の論文 1本を追加した。訳者としては翻訳作業過程で日本の介護保険を本格的に穿鑿することができた。テーマごとに韓国が今後、出くわすであろう問題を解いていく姿勢で臨んだ。大変だったが有益な時間だった。訳者が常に口にすることだが、大韓民国はすぐ側に少し先に行きながら他山の石の教訓を投げてくれる日本を持っており楽な点が多い。国家の間のゼロサムゲームの競争がはびこった経済や貿易分野とは違い、よくできた施策(Best Practice)と良い経験を交換するのが奨励されるソーシャルポリティクス分野ではもっとそうである。

医療保険の導入過程でもそうであったが、長期療養(Long Term Care)制度を取り入れるための論議過程においても数百、数千億ウォンの研究費を費やしても求めることができない重要な情報を日本は提供してくれる。このような社会的実験はいくらお金をかけてもできない。法律体系や社会文化的環境が相対的に私たちに似ている日本で成り立つ過程だからよくできている政策、できなかった政策、良い結果、悪い結果が仕分けなしに一つ一つ

が皆参考になる。そして日本人たちの徹底的な記録文化、細心な性格などは豊かな情報を提供してくれる。

この本は以上のような立場で作られた。日本をそのまま模倣すべきでないとか日本の制度をモデルにしなければならないというのではない。日本から学べる点を学ぶことで試行錯誤を減らそうというのだ。一国の制度を理解して示唆を得るためには制度の前後文脈に対する理解が先行されなければならない。これは簡単な仕事ではなく、多くの情報が必要であり、多くの時間が要求される。この本がこれらのための一つの判断材料として使われることで試行錯誤を減らして、私たちに合う制度形成のための時間を節約する助けになったらと思う。

2006年4月18日

丁炯先 (Jeong, Hyung-Sun)

延世大学保健科学大学保健行政学科教授

(日本語訳：鄭丞媛)